

# 熊本大学黒髪の一次避難所と大学サークル

## —— 社会的ジレンマを解く群れ行動 ——

山 田 誠

### 《要 旨》

大災害時の一次避難所は、いつの場合も大きな困難が伴う。本稿は熊本地震において避難者が自分たちで良好な関係を築いた熊本大学黒髪の一次避難所を取り上げる。そこでは、避難生活を主導的に支えた大学サークルのメンバーたちが驚くほどの活動成果をもたらした。本稿はそのパワーの秘密について特定の仮説（群れの理論）の観点から考察し、引き続いてそれを可能にした大学サークルの活動構造を吟味する。

当初に運営本部を設置した大学生たちは、前震から計算して4日ほど経つと本部席から退く。それにもかかわらず、大学生たちが本部席から消えた後も、一般の避難者たちは混乱することなく、大学生が決めたスケジュールに沿って自分たちで運営し、外国人グループを交えた避難生活を続ける。それを可能にしたパワーを探っていくと、日常の大学サークルにおける一般メンバーとリーダー層の相互関係に突き当たる。

避難所の場合一度きりの滞在プロセスだが、大学サークルにあっては逆に、活動の維持・存続が共通目標となる。共通目標追求のために、気ままなメンバーをどれだけ深く活動に巻き込めるかがリーダー層の力量にかかっている。この時、大学サークルで期間限定のリーダー層が下す決断は、個人の自由を前提にして、それと集団の共通目標を両立させることが強く要求されている。これは郡司所説が打ち出す群れ行動そのものである。その一方、避難所において明確に文化価値の異なる外国人グループが一緒になって、「協力する社会」を出現させた活動展開は、確かに都市型災害に際しての対応モデルを構築するうえでの手がかりとなる。

### 目 次

1. プロローグ——避難所研究の難問と大学生のしなやかさ
2. 様々なタイプの避難所と亀田氏の探求関心
3. 大学生主導の本部立ち上げと群れの理論
4. 群れ型運営の課題と熊大黒髪をめぐる内外環境
  - 1) 現場の活動スタイルと避難所が抱える内外との関係性
  - 2) 各種の情報交換と方向共有型の本部発信
5. 大学生主導本部の解散と協力行動の出現
  - 1) 本部交替後の運営と自主的な援助行動
  - 2) 外国人への対応と「仲間感情」の壁
6. 大学生のあいまいな自由と大学サークル
  - 1) 大学サークルの諸要素および個と集団の関係
  - 2) 認知的共感と大学サークルの社会的な位置
7. 結び

## 1. プロローグ—— 避難所研究の難問と大学生のしなやかさ

2024年は波乱の幕開けとなった。元日の夕方に能登半島で起きた震度7の地震である。輪島市の大火を伴う地震では、古い家屋の倒壊が多く、また寒空の下に3万人超の人々が避難した。この被災から想起されるのは、2016年4月に発生した熊本地震のかなり違った避難のあり方である。熊本地震は、震度7が二回発生し、その上に強い余震を頻発させたこともあり、都市部を中心に18万人を超える避難者が現れた。人々の避難パターンをみれば、熊本地震は広域避難も大々的に発生し、都市的色彩がより強かった。都市部では当然、事前に準備した指定避難所だけでは足りず、数多くの避難所が臨時に開設された。

本稿の主要な検討素材は、大勢の人が逃げ惑うなかにあって熊本大学黒髪キャンパス（以下では熊大黒髪と略記）に設けられた臨時の一次避難所である。この4月30日に閉鎖された大規模避難所の1つは、防災知識のない大学生が実質的に主導したのみならず、運営内容・プロセスまで含めて、避難所運営として大注目に値する事例である。しかるに、専門家による数多くの熊本地震分析の文献の内に、この事例の検討はほとんど見出しえない。

それは、避難者個人の自由と一つの集団としてまとまる社会性との両立を探るという課題について、多くの災害対応の専門家たちが研究視野に入れれないが故でなかろうか。これに対して、郡司ベギオ幸夫・村上久氏による「頑健な群れ」モデル論文は、熊大黒髪の大学生たちが展開した活動を学問的に解き明かすうえで1番目の理論的武器となる。

諸決定が時間的なズレを伴いつつ次々に下さ

れていく状況と、出現する新しい事態にも既知の対処行動で適応できるとのリーダー層の思い込みによって先導される集団の場合は、いたる所で上記課題である両立が生じるとの結論を、両氏は導いている（郡司ベギオ幸夫・村上久、2020年）。怖さから逃れたい一心で人々が集まり、随所で困難が起きる一次避難所。そこでは、避難者の自由と集団全体が一つにまとまる社会性の両立など生まれそうにない。けれども、熊大黒髪の避難所は、郡司・村上氏らが解明する理論モデルと合致する運営を展開したがゆえに、極めて興味深い避難所運営を築き上げられたというのが、本稿の提出仮説である。

一方で、災害直後の被災者救援のための制度・政策・施策をみると、大災害が起こるたびに整備・拡充されてきた。それにもかかわらず、熊本地震後の一次避難所ではいたる所で混乱状態が続いた。避難所が混乱する事態を俯瞰的にとらえれば、被災地にあっては日常のスムーズに流れる生活世界が破れて、安全・安心と結びついた資源が極度に不足する事態である。

その資源を求めて、お互いに顔も知らない雑多な人々が集まる避難所は、誰もが自由に入ることができる集団の場である。ここでの混乱とは、自己の利害を優先する利己主義者が増えれば増えるほど、利用できる総合的資源がますます欠乏していく事態に他ならない。これは社会科学の理論分野でいえば、社会的ジレンマの枠組みである。亀田達也氏は、実験社会科学のアプローチを用いて同じタイプの課題に挑んでいる。

彼の研究にあっては、共同体や共通する文化価値の下で「仲間感情」が成立する場では、解決策を見つけ出せるものの、多様な人々が混在し「仲間感情」が成立しない場における実用主

義的な解決策を見いだせていない。しかるに、彼は「深い実用主義」に立脚する解決策の追求を断念することなく、「『実用性を重視した深い泥沼』にあえて踏み込む覚悟」を表明する（亀田，2017年，p167）。彼の研究アプローチに引きつけられれば、深刻な災害の際に一次避難所で頻発する混乱は、顕在化した社会的ジレンマに他ならない。実社会での経験が乏しい大学生たちは突発的な大地震の現場において、混乱問題に対する実践的な答案を書いて見せた。だとすれば、混乱を抑制し「協力する社会」を築いた事態は、十分に研究に値するといえよう。

彼らは被災者が集まる避難所で、なぜ社会的ジレンマを解く実用的な手法をいきなり編み出したのか。この謎を解くためには、亀田氏が設定する理論の枠組みを2方向で改変する必要がある。1つは、均質なメンバーで構成される舞台の変更である。登場人物は一般の避難者、それと集団全体を牽引する運営の担い手という2層の内部構成にする。そして、運営の担い手に検討の重心を置く。もう1つの改変は考察の範囲である。被災後に人々が滞在する時間・空間内で起きる事態に限定せず、発災より前の平時における行動や生活場面での発想が緊急事態下にある人々の行動に与える影響を取り込む。これは、本稿が細田聡・井上枝一郎氏が提唱する緊急事態下の行動連続説の立場をとることを意味する。

たとえ考察対象の枠組みを拡張し、細田・井上説を採用しても、防災に無知な大学生の前に次々現れる未知の事態と才気煥発に処理する態度に切り込む理論は、災害関連文献に出現しない。外部から次々に飛び込んでくる諸課題としなやかに向き合う心のあり様を読み解くのは、知性論や群れの理論を展開する郡司所説であ

る。では大学生たちが、他の災害専門家や市町村職員にはない、未知の事態への向き合い方を身に付けているのはなぜか。未知の人々に心を開いてもらう必要性が日常における大学サークルに内在しているためだとの見解を、本稿はとる。少し具体的に言えば、彼らが弱体な存続基盤しかない大学サークルに参加し、自らサークルを継続的に維持しようとする意志をもって活動に携わるプロセスが、未知の人と向き合う態度を身に付けさせるとみる。

本稿は、狭義の災害研究が対象とする範囲を大きくはみ出して、異文化の人々をも含んだ「協力する社会」を創出していく道筋の観察と、それを可能にする学生生活内部にある活動構造を掘り出して、探求的な仮説の提示を企図する。郡司・村上氏の研究で解明される理論モデルとは異なり、雑多な要素が複雑に絡み合った熊大黒髪くまおほくまの避難所が本稿の素材である。そこで展開される様々な状況に応じた人々の活動を合理的に理解するためには、多角的な考察アプローチから導かれる諸研究の成果に依拠せざるを得ない。

## 2. 様々なタイプの避難所と亀田氏の探求関心

(i)

災害は物理的な自然現象ではなく、社会的な事象である。8年前の熊本地震と今回の能登半島地震を較べると、このことが強く印象づけられる。倒壊家屋が多く、それによる死者数は熊本地震の数倍となる能登の地震。それほどの被害を被ったにもかかわらず、人々は平静に避難し、厳しい滞在環境の下でお互いに助け合う。一方、熊本地震では都市部を中心に数多く設けられた避難所。そこでは、誰が責任者やリー

ダーかわからず、どこもしっかりと「運営されている」状況にはなかった、と報告される（諸橋、2021年、p7～9）。

地震の強度面からは類似性が見られようとも、災害などに遭遇した人々の行動や態度に顕著な相違が生じる事態について、実験社会科学の手法を用いて解明に当たるのは亀田氏である。彼の主要な研究関心は社会的ジレンマにある。それを簡潔に表現すれば、まずヒトの社会行動はとても複雑だが、全体としての行動は「生き残りのためのシステム」だと理解できる。とはいえ、「多くの人々を含む相互依存」の環境下であって、短期的に個人の利益を優先させることで、「個人の利益と社会全体の利益が一致しない」事態はしばしば生じる。これが社会的ジレンマと呼ばれる事象で、「共有地の悲劇」は有名な事例である（亀田、2017年、p12, p56～59）。

そうしたケースは例外ではなくて、大災害に直面して自己の安全・安心を最優先する動機で人々が集まった避難所では、支配的な状況といえる。この事態に置かれた人々が、果たして協力する場（=社会）を築けるか。これが亀田氏の設問であり、彼が導きだす答えは、強いコミュニティ関係などが存在し、「仲間感情」が成立する場では実現できる。しかし、コミュニティ境界の外側、異文化価値が入り交じった場ではできない、である。というのは、人々が当然と考える分配の原理・規範が社会・文化価値のあり方しだいで異なるからである（亀田、2017年、p129）。

彼が導きだす見解は、能登半島地震と熊本地震の避難所における人々の態度の違いを説得的に説明する。それでは、熊本地震に遭遇した都市部の人々は、いかにすれば協力する避難所を

築けるのか。彼によると、異なる文化価値が入り交じった社会は安定ではなく、社会の協力は崩れてしまうことになる。その先で、「生存の脅威となるさまざまなリスクを集団的に減らす」仕組みを生み出すには、折衷主義的な「深い実用主義」を目指すことになるとの指摘に終わる。本稿は亀田氏の到達地から出発する。亀田氏があえて「実用性を重視した深い泥沼」に踏み込む覚悟を表明するほどの難問に対する答案の1つは、防災知識のない大学生が主導した避難所運営に見出せるのではないか。これが本稿の探究関心である（亀田、2017年、p157, p166～167）。

検討の第1歩は現下の災害対応研究の概観である。というのも、その研究実情が私に、先行研究にはないアプローチの採用を決断させた実践的な契機だからである。亀田アプローチを含めた3者の位置関係を図式的に表現すれば、次のようになる。本稿が主流と位置づける諸研究は、用いる手法が多様であるものの、与え手サイドにたって分析する点では共通している。他方での亀田アプローチはもっぱら受け手サイドだけに着目する。

両者に比すと、本稿の立ち位置はかなり複雑である。受け手サイドをベースにすえながらも、与え手を含めた広い外部世界との関係が欠かせない。というのも、外部の世界こそが能動的な位置にあり、避難者である受け手は受動的な位置に置かれる。そして、受け手である避難者集団の内部でも、また能動的な立場と受動的な立場が取りあげられる。なぜ、こうした複雑な関係を組み込むのか。緊急事態という困難な事態下であって、自由に行動する意思と権利を有する個人が集団として協力する社会を築くには、それだけ内外の諸要素との重層的な調整が

欠かせないからである。

これとの関連でいえば、通常の避難所においては権限、物資、専門知識といった諸資源を集権的に供給する与え手グループが運営の主力の座につく。しかるに、熊大黒髪の場合は、その主力として避難者の内部から大学生が登場してくる。つまり、大学生自身は、避難者、それも社会的な経験が乏しくて、一人住まいという不安定な状態にさらされた人々であり、独占的権限をもたないという点で、熊大黒髪に避難した人々からなる集団は、亀田氏の枠組みとの重なり度合いが高い。

(ii)

日本における災害対応の一次的な責任は市町村にある。しかるに、菊池洋氏によれば、東日本大震災から以降の国は、「従来の公助として担ってきた責務を、……個人または地域へと緩やかにシフトさせる」制度設計へと「転換」を図りつつある(菊池, 2016年, p89)。

制度設計における転換を主導する中央防災会議は、長期的には一定の責務を負い、自主防災組織をも担う「行動する個人」を望みつつも、熊本地震では、いたる所の避難所で持続的な混乱を見せつけられる事態になった。すると、2016年の報告書において「異例といえるほど」、自治体などの職員に対する「防災研修の必要性」を強調する。この国の方針を前にして木村拓郎氏は、報告書の作成者たちが強い不安に襲われ避難所に集まった人々に対して、物心の両面で安全・安心な避難生活を提供する課題の困難さを把握できていないと、批判する。そして、彼は災害対応に一次的な責任を有する市町村の職員が置かれている状況(高度な応急対策計画に含まれる内容理解の難しさ、目の前の仕

事に追われて専門用語を調べる時間もない職務実情)に対して同情する。とはいえ、与え手サイドの批判にとどまり、新しい避難所運営のあり様呈示はしない(木村, 2018年)。

雑然とした避難所が多かった熊本地震ではあるが、良好な運営と評価されるケースもあちこちで見出されている。この種の調査研究がもっとも目立つのは、指定避難所に選ばれることが多い小中学校である。その運営については教育学関係者たちが事例研究を相次いで発表している。元兼正浩氏は、避難所となった学校の調査研究についてサーベイをしている。そこででの主要なアクターは、学校管理者および一般の教職員である。彼らは学校再開の目標と目の前の避難者に対するケアの両立にジレンマを抱えながら奮闘している。その実態を吟味する諸文献を調べつくして、元兼氏は次のように評価する。それらの研究は、「教職員を主語(念頭)に置いた枠組みを越えられて」おらず、結果として「実践のリアリティを捉えるまでに至っていない」と手厳しい(元兼・鄭修yeon・柴田・原北, 2020年, p97)。さらに、「教員を主語に設定しない」アプローチ、また「学問的越境」が必要だと指摘はするものの、探求の手がかりは見いだせない。

これら与え手サイドの側に重心を置いた分析から距離を置いて、与え手と受け手をつなぐ避難所運営の中枢に焦点を合わせる研究は、社会関係資本論の研究者に多い。その一人である青山貴光氏は、「突発的な共同生活の場においてリーダーの存在は不可欠」だとする。その上で、リーダーの個人的な資質を備えた「存在が避難所にいるとは限らない」ので、避難者、施設スタッフ、外部からの救援ボランティアによる共助組織を築くことが、良好な運営の要諦だとす

る。彼の場合、3者のうちでも広域ボランティアが「連結ピンの役」を担い、支援成否の核心を握るとの見解である（青山，2018年，p40～42，p52）。

同様に3者による共助に着目しつつも、地元埋め込まれているコミュニティの関係を資源とみなし、その代表である地域リーダーを連結ピンと位置づける研究者は少なくない。その一典型は、集団避難し、避難所を自主運営した益城町津森地区について検討する黒木誉之氏である。彼は、ベースとして伝統的なコミュニティを資源として重視しつつも、長期に及ぶ避難生活では、仲間感情を積極的に醸成する工夫が大切だと主張する（黒木，2020年）。

これらの良好な運営に関する研究の対象は、短期が原則の一次避難所、かつ異文化的な行動パターンをも広く含んでいる都市空間の避難所ではなく、伝統的なコミュニティ関係が色濃い地域を選んでいる。一部に農村地域と類似した関係が存続する地区も見られる都市内部にあって、住民たちを積極的に防災にかかわらせようと、国が力を注いでいるのは自主防災組織である。柿本竜治・吉田護氏は、熊本市内に設立されている自主防災組織が地震発生時にどう活動したかについて調査分析している。

市内にある世帯の78.1%が加入している組織は、加入世帯の規模も平時の活動状況もまちまちである。平時にもっとも実施されていたのは、消火訓練、避難訓練であって、40%を超えていた。実施比率が最も低い訓練は避難所運営である。現実には地震が起きた際に行われた支援で一番高い活動項目は、食料管理配布の16%程度である。要するに、「日頃の活動水準が災害時の活動水準に影響している」ことは分かったけれども、自主防災組織は「災害時にあまり機

能しなかった」といえる。

だとすれば、「広域に大規模な災害が発生した場合、行政の災害対応力には限界がある」として、住民サイドから打開方向を見出そうとする試みは、期待もてる手掛かりがないことになる（柿本・吉田，2019年，p1086，p1088，p1093）。それと同時に、この研究からは、都市的な社会になるほど、一定の資金援助という条件を付与しても、市町村が災害場面において住民の積極的な関与を引き出すのは容易でなく、とりわけ避難所運営への参加は困難だとわかる。

問題点ばかりが目立つ都市的空間における災害対応にあって、同じく熊本市内に立地する熊本学園大学のケースはひと際高い注目を集める。この避難所の経験は、「管理はしない、配慮する」のキャッチフレーズ、および24時間の支援態勢を45日間維持した運営展開でもって、大学関係者の間では有名である。とはいえ、ここには2つの特別なファクターが見いだされる。1つは、避難してきた地元の人々と学園大の間に長年にわたり築かれている交流関係である。そのため、周辺住民は近くの指定避難所へは向かわず、学園大を選んでいる。つまり、地元住民の学園大に対する信頼度は高く、持続的な交流によってある種のコミュニティ関係が成立している（山田，2022年，p202）。もう1つは、マネジメントの機能を集権的に行使した中核教員たちの存在である。

何よりも彼らは、災害対応について知見がある（メンバーの一人は阪神淡路大震災の経験者）。また、自分たちが目的に合わせて学生ボランティアを募集したり、知己の専門家に協力を依頼したりして、必要な人材を集めている。さらに、避難者を早く自宅に戻すために、学生

ボランティアを自宅の片づけ作業に派遣する活動も注目される。その半面、45日間の最後まで、彼らは自己犠牲的に半ば常駐の態勢をとった。ここからは、与え手と受け手を調整するポジションの教員たちが、極めて広範なマネジメント機能を集中させた様子が見える。これを他の大学が学習し、全面的に採用することは、可能であろうか。他大学で実施が可能かと問われた運営の責任者は、率直に「たぶんできない」と答えている（山田、2022年、p201）。熊大黒髪避難所は、本節で吟味したいいずれのケースとも似ていない。



本章における地震対応の活動・研究に関する検討からは、「仲間感情」の壁がない状態で協力する社会を築く「深い実用主義」にとって、手本となるスタイルは見出せなかった。とはいえ、都市的空間で「協力する社会」を築こうとする際の手がかりはいくつか入手できた。それらを略記すれば、

- ・ いくらかの経済的なインセンティブを事前にと与えていても、緊急事態下で積極的に行動する住民組織は産み出せない。
- ・ 社会的ジレンマ状態に置かれた集団をまとまりのある群れへと編成するには、諸資源の入手・管理・配分を担う管理グループが欠かせない。
- ・ 能力のある管理グループがすべてを自己の手でマネジメントすると、一般の避難者は全面的にお客様ポジションになる（そこから、相互に協力する社会は産まれぬ）。

上記の手がかりを活かして、「深い実用主義」と整合的な避難所のあり様を開拓しようとすれば、未だ検討の場に登場していない理論的知

見、それに合致する現実の事例へと検討の腕をのばさなければならない。このために本稿が採り入れるのは、情動的共感および認知的共感を合わせた共感研究、緊急事態下における行動連続説、そして、天然知能（知性類型論）を含む郡司氏の群れ理論である。

熊大黒髪の大学生たちは、突発的に起きた大地震の下で一千人を超える避難者と共に、時間が経過するにつれて協力する社会を実現していった。専門家たちが合理的・体系的に準備した災害対応の策がもろくも崩れ去る場においては、大学生による運営の特質をつかみ取るためには、これらの諸学問の知見に依拠しなければならない。以下で吟味する避難所の運営は、現代の都市的空間という複雑な社会環境において、集団よりも「個人を優先させるヒト」が生き残りの適応戦略として選びとった群れ生活を、被災下で自立的に再創出するプロセスだといえる（亀田、2017年、p32、p13）。まずは何が起きたのか。現場の運営を1つのまとまりのある活動として組み立てるには、諸々の学問的知見に依拠せざるをえない。

### 3. 大学生主導の本部立ち上げと群れの理論

(i)

能動的であるとは、周囲と無関係に自分勝手に能動的なのではなく、周囲との関係において、結果的に能動的にされてしまうことを意味する。受動的であるということも、いわば他者を能動的にするために、能動的に受動的になる（郡司、2013年、p284）

真夜中に起きた本震（16日、1時15分）から2時間半後に、団体単位で活動していた大学生たちは自分たちによる運営本部の結成を決定

し、次々と方針や取るべき行動を決定していく。9時には、別計画を取りやめて体育館に駆け付けた安部美和氏（地域防災学が専門の助教）がアドバイザーとして加わることで、運営体制は確立する。行動を時系列的に追いかければ、能動的でスピーディな行動ぶりである。

この出来事は、大学生の行動心理に引き付けられれば、他者の身体的痛みにも共感を覚える情動的共感から、他者の社会的な痛みに対して共感を抱く認知的共感への重心移動ととらえることができる。その一方、功利主義と認知的傾向の折衷で「仲間感情」の壁突破を目指す亀田氏の探求関心にとっては、見逃しが許されない重大な事象である。というのも、自由な個人が寄り集まった集団を設定する亀田氏の理論モデルは、個と集団を結びつける凝集性の要素を含んでいない。それに対して、現実の避難者と向き合う大学生は、同じ避難者の内側に居ながら、まとまりのある避難所づくりの決意を示している。もっとも、目の前に事実だけが立ち上がっていて、それを生起させるパワーの正体はまだ見えていない。これを読み解くのは、理論生物学者の郡司氏による群れの理論を中心とした所説である。

彼は自由に行動するバラバラな個の集まりがひとかたまりになって行動する群れに転化する事象を、次のように整理する。その集団が多様性を担保したままで、社会性（全体としての達成目標に対する拘束性）を追求して、個では見られない集団の効果を発揮する状態への移行である。この運動体は、基本行動だけを繰り返す個と、リーダーとして先頭に立つグループの2層構成になっている。

個々のメンバーは複数の移動可能性を有し、たがいに周りの動きを予期しながら移動する。

この時、全体としての群れに目をやると、個体、個体にあっては引き受けられない行動を群れのリーダー層に負わせて、リーダー層が示す方向についてく行動パターンをとる。この運動スタイルで、「集団と個の非分離性、両義性を織り込」んだ群れの振るまいが描き出される。また、そこで見られるリーダーの能動性は、他者との関係性においてのみ意味をもつような能動性であって、その個性（多様な行動の選び方）も他者との関係抜きには成立しない。

ここでの個々は、互いに相手行動を予期しながら、自己の行動を決定する。そのうち、個がしだいにたくさん集まり高密度になる一方で、行動したい場所が著しく重複してくる。すると、イヤイヤながらのせられて熱湯に入るダチョウ倶楽部の竜平に似て、ミナミコメツキガニの小グループは、個では入ることのない水中へと先頭切って入っていく（郡司，2013年，p3，p6，p7）。かくて、集団全体を牽引するリーダー層が集団内から出現する。さらに欠かせない行動要素は、多大なエネルギーを費やす先頭グループが途中で、基本行動に専念している他メンバーと交替することである。ここに「集団と個の非分離性」が現象面に現れる。また群れとしての安定性にとっては、群れ行動をできるだけ細分化できること、その限定された運動行動にあっても、お互いに時間をずらすこと（非同期化）も大切である（郡司，「ダチョウクラブに群れの原理を見出す」，2024年）。

ここで要点紹介した動物を対象とする群れの行動理論が、本部を立ち上げた大学生の行動スタイルとどの程度重なるのかを、吟味しよう。検討の始まりは前震の発生時点となる。というのも、スピーディな運営本部の立ち上げは、当事者たちの意識の上では、前震と本震を包摂す

る災害対応の一コマだからである。

(ii)

地震発生後の学生目線：

- ・(発災後すぐ) 大学に行って、信頼できる友だちだけでグラウンドに集まったけど、やっぱりというか、パニック寸前になっている人もいた。
- ・誰が指揮をとっているのか分からなかった。
- ・(前震の際に備蓄品を)使っていたので、大学にある備蓄残数が分からなかった。

(“416”編集委員会、『記録集』, p26, p6)

運営本部の立ち上げは、避難者たちを統合する観点に立てば重要な画期となるが、当の大学生たちは別次元に踏み込む決定と見ていない。それは、熊大黒髪に出現した被災者へのサポートが次第に拡充していく一連の過程にあって、一段階ステップアップした措置という位置づけである。したがって、法学部のサークルによる提案がなされてからわずか1時間後、避難者が続々と押し寄せて体育館内の混雑度が増すさなかに、各種団体の代表が集まって体制づくりを決定している。

逆に言えば、防災の知識どころか大災害も全く経験していない大学生にとって、災害下で出合う事象はすべて未知の出来ごとである。その彼らに、前震・本震という学術的な基準でもって対応を定める発想は生まれようがない。目の前に次々と現れる新しい事態に対して、自分たちの持ち合わせの知識・入手情報・利用可能な物資を総動員して、人々が少しでも不安を和らげ、安全・安心を感じられる状況づくりに係るのみである。それがいかに遂行されたか。時計の針を支援がスタートする前震より少し前に戻そう。

14日の夜、大学構内には少なくない大学生たちが居残っていた。始まったばかりの新入生歓迎イベントをいかに魅力的な内容にするかが、それぞれのサークルで活発に話し合われていた。すると、これまで経験したことのない地震が21時26分に起きる。4月の寒い夜であったが、人々は安全を求めて大学のグラウンドに次々と集まってきた。大学生たちはサークル単位で動き、30分後には集まった人々が座れるように、ありったけのブルーシートを敷き詰めている。そして、2時間後には安全確認がされた体育館へと人々を移動させた。

この前震の段階では、朝になると余震も落ち着き傾向が見られたため、避難者たちは体育館から姿を消していく。それに合わせて、サークル員を中心にブルーシートを回収し、洗浄・掃除などの作業に着手していく。夕方になっても、親元を離れて一人暮らしを始めたばかりの1～2年生など、不安を隠せない大学生たちは引き続き夜を体育館で過ごすことにした。片づけが終わり、ホッとした気分で横になってから間もない夜中、1時25分。「まさか」の2回目。前回の数倍のエネルギーを伴って発生した。大学生たちは、グラウンドへ飛び出すと、そこから率先して支援を再開する。

自分たちが担う活動は前震から連続しているとの認識を端的に示す事案が、5時に開かれた本部の第2回会議に提出される。この間、休みなく働いてきた大学生たちには疲れの色が見えるとして、各団体に対してスタッフに十分な休憩を与えるべくシフト制を採用するよう求めている(その実施に当たって、本部は交替した大学生が気兼ねなく休めるよう、一般の避難者からは離れた別室を確保した)。

他方、本震の衝撃で身の危険を感じて逃れて

くる避難者の数は、前震をはるかに上まわる。安全を確認して、3時から開始された体育館への住民誘導の際には高齢者や体調の悪い人を優先して、場所を割り当てている。ここまでの主要な行動は、もっぱら情動的共感に支えられて提起されている。また、運営本部設置への事態展開からは、集団密度の高まりに押されて、普段は嫌な水たまりであるが、あえて水に入っていくカニの先頭グループとの相似性が見て取れる。

#### 4. 群れ型運営の課題と熊大黒髪をめぐる内外環境

##### 1) 現場の活動スタイルと避難所が抱える内外との関係性

###### (i)

他の高校に熊大生が溢れていたため、16日に熊大生だけでも余裕のある黒髪キャンパスへ移動させようとしたけど、学生支援部から「誰がそんな許可したのか」……と言われてしまった。……突然責任問題を出されて怒られたのは理解できなかった。

(“416”編集委員会、『記録集』, p27)

災害直後に設けられる一次避難所は、物理的・社会的な要因が重なり合ってそれぞれの設置場所ごとで運営スタイルは違っている。とはいえ、指定避難所を軸にしたある種のイメージが流布している。例えば、食事の提供は重要な活動であり、一日3食の配給に当たっては公平性が最優先事項である。時間の経過とともに温かい炊き出しの回数が増える、といった具合である。これら普及しているイメージに照らせば、熊大黒髪の避難所はかなりの変型パターンに属する。

他避難所よりも恵まれていた面から取り上げ

ると、停電にならなかったため、放送設備や各種の機器を利用できた。地下水をくみ上げていたので、トイレの水問題が起きなかったなど。また、大学の保健センターが中心になって、24時間の救護体制を維持（看護や養護系を学ぶ大学生もシフト制を採用して、相談業務などを担当）。それに、大学間の支援協定に支えられて、一般の避難所よりも迅速に物資が搬入されている。さらに、大学生協が頻繁に連絡をとり、不足する物資を補給している。反対に、待遇的に他よりも不利な滞在環境に目を転じれば、体育館内は土足禁止で清潔さの点では好条件であるものの、1日2回の清掃のうち、午後の清掃の際は全員の参加が求められた。滞在生活で重要な行事である食事は1日2食。それも基本的に冷食ばかりである。

とりわけ注目されるのは、黒髪の避難所と関係のある「大人たち」の態度である。熊本大学が管理する一連の敷地内には、いくつかの一次避難所が開設されている（表1）。それらの1つである熊大黒髪の避難所の場合は、大学の事務局サイドは避難所の活動充実に対して慎重な態度に終始している。そして、熊本市役所にあっても、運営本部の決定事項をうまく市の本部につなげないばかりか、くるくる変わる担当者間での引継ぎもキチンとなされないなど、消極的な態度が目立つ。また、大学教員はごく一部の協力的な教員を別にすれば、もっぱら学生の安否確認に注力する（この時、他の地区にあって指定避難所となっている薬学部は、好対照な活動を展開している。教員が主導的に運営しただけでなく、大学事務局と市役所からの持続的な要員支援をも得て、避難所の運営が順調に展開された。その結果、一定の期間後には町内会を主力とする避難者中心の運営に移行す

表1 熊本大学の各避難所における避難者推移（前震か2週間）

|          | 黒髪地区  | 薬学部  | 保健学科 |       |       | 合計    |
|----------|-------|------|------|-------|-------|-------|
|          |       |      |      | 附属小学校 | 附属中学校 |       |
| 4月14日(木) | 1,000 | 200  |      |       |       | 1,200 |
| 4月15日(金) | 50    |      |      |       |       | 50    |
| 4月16日(土) | 1,200 | 600  | 300  | 700   |       | 2,800 |
| 4月17日(日) | 500   | 200  | 200  | 500   |       | 1,400 |
| 4月18日(月) | 300   | 250  | 200  | 100   | 320   | 1,170 |
| 4月19日(火) | 310   | 220  | 150  | 110   | 60    | 850   |
| 4月20日(水) | 170   | 200  | 150  | 130   | 112   | 762   |
| 4月21日(木) | 154   | 125  | 150  | 90    | 100   | 619   |
| 4月22日(金) | 120   | 80   | 90   | 20    | 83    | 393   |
| 4月23日(土) | 157   |      |      |       |       | 157   |
| 4月24日(日) |       | 81   |      | 43    | 51    | 175   |
| 4月25日(月) | 78    | 90   | 164  | 20    | 20    | 372   |
| 4月26日(火) | 60    | 70   | 163  | /     |       | 293   |
| 4月27日(水) | 57    | 34   | 163  |       |       | 254   |
| 4月28日(木) | 49    | 22   | 40   |       |       | 111   |
| 避難所閉鎖日   | 4月30日 | 5月2日 | 5月8日 | 4月26日 |       |       |

(出所) 熊本大学『熊本地震記録集 4.14 4.16 想定を超える混乱に直面して』, 2017年, 48ページ。

る。：甲斐広文, 2017年3月5日, を参照)。要するに、いくつかの恵まれた環境的、社会的要件が存在した半面、避難所運営に直接に関係する立場の人たちをみると、あたかも災害現場を目の当たりにしても日常の仕事領域から外へ踏み出すのを回避しているかのごとくに映る。この「大人世界」の環境下で、大学生たちの主導する避難所の運営がはじまる。

ところで、郡司氏が群れの行動理論で観察対象にすえるのは、自然界に展開する動物たちである。現代の都市空間に住むヒト社会に目を転じると、「協力する社会」に向かう群れ行動は、個と全体の意思決定のあり様だけでは実現できそうにない。そこには、複雑な社会と絡みあう集団をうまく機能させる組織性と計画性が不可欠な要素として加わる。熊本地震を取り上げる

多くの観察者が目を向けたのは、フォーマルな災害対応における2要素の無秩序ぶりである。群れ型の行動から立ち上がった避難所にあっても、スムーズな運営を遂行しようとするれば、これらの要素は欠かせない。運営マニュアルをもたない大学生には、いきなり本番となる。果たして、2要素が必要となる場面で、群れ行動としての独自の運営を見出すことはできるのだろうか。

(ii)

体育館にある既存のごみ箱では全く足りないほどの量だったので、新しいごみ箱を設置しました。また、トイレや水場なども清掃を行うなどしました。……トイレ清掃などの簡単なことは避難している人にも協力してもらった方がよ

表2 熊大黒髪の避難所内に用意された担当窓口

| 窓口    | 活動内容  |
|-------|---|
| 本部    | 各窓口の総括を行う。当初は各学生団体のリーダーが参加。学生主導の本部が解散後には、大学事務職員及び市役所職員が配置され、情報の集約を行うとともに、関係機関との連携を行う。   |
| 救護    | 看護師や養護教員を目指す学生の有志でシフトを編成。1日2交代制で、各4名が対応。保健センターの医師・看護師と連携して、簡単な処置や血圧測定等を担当した。避難所閉鎖まで学生が対応。   |
| 環境    | 主に館内のごみ置き場の管理、トイレや管内の衛生状況を担当。学生中心の運営が終了した後は、避難者が役目を引き継いだ。   |
| 外国人対応 | 館内放送及び館内掲示物をすべて二か国語（日英）で発表。そのため、留学経験のある学生や英語の得意な学生が対応（高校生も応援）。その後、留学生および職員が窓口対応を引き継いだ。  |
| 情報    | 4月16日は余震だけではなく大雨洪水警報が市内に発令されたため、24時間体制で降雨状況をラジオから収集した。その後、避難所周辺のインフラ復旧情報などを新聞やインターネットから収集し、館内に貼り出した。  |
| 物資管理  | 支援物資の保管把握や、毎食の食事の配分を決定する。また、情報交換が可能であった近隣の避難所と連絡を取り、不足物資を回すなど、支援物資に関する全般を担当。学生中心の運営が終了した後は、避難生活を継続した学生ボランティアが引継いだ。  |
| 受付    | 避難者の情報を世帯別に把握。家族構成まで把握しその情報を物資管理の窓口と共有して食事数を決定した。また、アレルギーや持病、介助の必要性などについても把握し、全体へ共有する。報道関係などマスコミ対応の窓口も行い、大学広報を通していないメディアの制限も行った。学生中心の運営が終了した後は、日中は学生ボランティアが対応し、夜間は市役所職員が対応した。 |
| 夜間警備  | 4月16日には、ほかの避難所から不審者情報や窃盗情報が伝えられて、夜間の見回りを担当。4月18日の学生中心の運営が終了した後は、夜間の避難所出入り口を1か所とし、受付が対応した。   |

(出所) 安部美和「熊本地震の経験からみる避難所運営と外国人避難者対応」, 日本災害復興学会『復興』Vol.8, No.2, 2017年, 25ページ, に一部加筆。

いと思いました。

(“416”編集委員会, 『記録集』, p23)

周りの「大人たち」が引き受けないので仕方なく受けて立った大学生は、群れ行動型スタイルを保持するのであろうか。その際、現代の複雑なヒト社会に求められる要素（組織性と計画性）が群れ行動の核となる個と集団の意思決定の関係に、いかに編みこまれるのか。これが本部態勢を築いた後の避難所運営にに対する検討関心となる。

事前には、災害対応が全く念頭になかった大

学生たちは、とりあえず本部と支援物資置き場、受付を設置した。まもなく参加した安部氏の助言により、運営体制は本部・救護・外国人対応・情報・環境（衛生）・警備・物資管理・受付の8専門部に拡充されている（表2）。そこには、組織性と計画性に対する強い指向が読み取れる（安部, 2017年（a）, p40）。

次々に変わっていく状況に合わせて諸事案を決定していく本部がまず必要とするのは、実際に動いてくれる活動メンバーである。たいていの避難所は働き手を見つけれられないで、人々が

勝手に動き回りだす。熊大黒髪の場合、それぞれの専門部署を複数の学生団体が分担し、必要なスタッフ数の確保は各団体に任せている。各団体は、シフト要員を含めて多くの人員を集めるべく団体メンバーなどに、ラインを通して呼び掛けている。現場でスタッフとして働いた人数は多い時に150人を超えている。この局面でも、多くの大学生が避難している熊大黒髪は例外であって、「ボランティアへ名乗り出た学生を断る時もあったほど若い人材が溢れていた」との記述がある（“416”編集委員会、『記録集』、p29）。

活動スタッフの確保と並行して、あれこれの活動があわただしく繰り返される。現場の活動で重要なのは計画性である。これに関してはマニュアルが有効であり、それがなければ経験である。代表的な取り組みの1つである食事の提供をとり上げると、やはり手探りで始めるしかなかった。配分の前提となる避難者集計、物資の出入り管理、配給物品の数量確認、配給の方法（熊大黒髪では、配給場所に並ぶ方式）などなど、決めるべき事項はいくつもある。あちこちで失敗を経験しながら、次第にパターンが出来あがっていく。

この一連の活動で注目されるのは避難者集計である。一日に何度も行われる集計は、さまざまな活動の採否にあたっての基礎情報である。その作業を、ここでは中高校生が担っている。彼らは人数を数える際に体調についても質問し、調子の悪い人を救護班に知らせてもいる（彼らは家族と共に自宅に戻ってからも、この作業時には避難所に戻り、作業に従事している）。また、外国語の得意な高校生たちは、本部が決定した事項の英語訳などでも積極的に協力している。彼らの行動は、大学生たちの利他

的な苦勞を目にする中高校生たちの間で、認知的共感が活性化した結果とだと見られる。この見方については、亀田氏による実験研究の紹介が裏付けている（亀田、2017年、p108）。

## 2) 各種の情報交換と方向共有型の本部発信

特に発災直後には情報がほとんど入ってこず、避難者は不安な時間を過ごしていました。……（本震のあった）16日の夜、熊本地方の天気は無情にも大雨の予報でした。……学生たちは防災ラジオやスマートフォンで情報収集（に励みました）

（“416”編集委員会、『記録集』、p9、p21）

周囲の状況に押されてやむなく群れの先頭に立つリーダー層が一般メンバーと基本的に異なるのは、その時々での判断で群れの進路を集団全体に指し示し続ける点である。この任務は避難所運営に引き付けられれば、運営本部が決めた事項の発信に当たる。もっとも一次避難所にあっては、各種の物資不足に基づいて社会的ジレンマが発生するだけではなく、外部世界と自己の関係を理解するのに必要な情報が決定的に不足する事態も生じる。その避難所内では各種の情報が飛びかかっていて、本部が方針指示を出す場合は、それらの情報を可能な限りつなぎ合わせて発信する。

実際にやり取りされていた情報としては、少なくとも次の5つが挙げられる。

### 1. 担い手スタッフ間での情報交換：

大勢のメンバーはあちこちの離れた部署に張り付いている。顔の見えないスタッフ同士が各現場の状況について相互了解をしたうえで、協調のとれた活動を遂行するために、頻繁なやり取りが生じる。

### 2. 本部と専門部所との情報交換：

本部が変化する避難所内の事態を的確につかみ、事態にマッチした方針を打ち出す際の判断材料の収集。それと、決定された方針をスタッフ全体が共有するためのやり取りが中心。

3. 避難所に接触してくる外部からの情報を仕分けして本部に挙げていく情報の整理：

大学当局、市役所、大学生協などの関係組織とは別に、数多くの外部者（諸個人、団体など）がコンタクトを求めてやってくる。その人々と最初に接触するのは受付である。その場の対応で解決できる細々とした案件は、担当者が直接に処理する。重要と判断した用件は本部へ挙げる。

4. 外部の世界で起きている種々の情報を避難所全体に伝える作業：

一般の避難者はとりわけ当初の段階で、地震による全般的な被害の程度、救援の進み具合、交通情報といった外部の動きから切り離された状況に置かれる。それが大きな不安をかきたてる。情報の専門部所は、主にこれらの情報を収集して避難者たちに伝える。その際、本部の諸決定も含めて、外部の重要な情報をも簡略化した壁新聞のスタイルで張り出す。これは、各避難者が自分のペースで、状況に合わせて読めるので重要な作業である。

5. 本部がその都度下した運営事項に関する決定の発信：

この発信時には、本部の活動がすべての避難者に可視化される。というのも、定期化されている本部会議は、避難者がいる体育館内で開かれる。つまり、決定にいたるプロセスが見える。そして、決定事項は構内マイクを使って、彼らが肉声で説明するスタイルである。

この情報交換の全体像から見えてくる運営スタイルは、自分たちでは変えられない自然物理

的な環境、外部からの物資などの供給、外部ボランティアの来場などといった外部世界から飛び込んでくる諸作用を、いったんは所与として受け止める。そのうえで、避難所の実情と何とか適合させるための最適手段を探し出す工夫が合理的に追及されている。

この情報交換のスタイルを共感研究の視点でとらえると、一般の避難者の認知的共感を喚起し、共感度を高める手法が用いられている。けれども、中高校生の協力を除けば、大学生による運営は避難者たちの中で積極的な協力行動を顕在化させるには至っていない。この事態に関連して、2人の研究者が異なる見解を出している。1人目の研究者は、援助行動が「見知った関係でなくても普遍的に行われる」という経験的事実を土台に据える社会神経科学の上田竜平氏である。異なる分析視角を提出する2人目は、文化心理学の新谷優氏である。彼は援助者と非援助者の位置関係には文化的な差異が強く影響すると説く。

上田氏が強調するのは、他者の行動を観察することで生じる観察者の共感感情が、自己が主観的に体感する情動と同じ神経表象として保持されるとする仮説である（「ミラーニューロン仮説」）。これによって生じる自発的な援助行動は、発達の非常に早い段階から観察されると、彼は主張する。彼の見解からすれば、本部や運営スタッフの活躍を眼前にする一般の避難者は、向社会的行動、援助行動を起こさないとはいけない。この点では強い疑問が残る。その半面で、彼の見解が目されるのは、援助行動ポテンシャルが発現するに際しては、身体運動を行う機会、あるいは体感性シミュレーションなどが「重要な役割を果たす」と、発現要件を提示している点である（上田、2020年、p296、

p299)。

他方の新谷氏にあっては、欧米などの相互独立的文化の下での援助行動は、個人の意思・価値観・感情・能力によって決定される。他方で、相互協調的な文化の下にある人々は、それと違って「援助行動は規範文脈依存型」だと主張する(新谷, 2020年, p342)。つまり、日本人の避難者は、他者からの評価などの外的な要因によって、強く影響される。確かに一般の避難者は、亀田氏を取り上げるケースに当てはめれば、評判などを気にしないでよい一度きりの滞在である。ということは、条件の面では社会的ジレンマの顕在化に適っている。これらの見解が、熊大黒髪の本拠地における後半の展開を読み解くうえでの補助線となる。

## 5. 大学生主導本部の解散と協力的行動の出現

### 1) 本部交替後の運営と自主的な援助行動

#### (1)

(18日昼に) 運営本部を解散したとき、避難所に来ている人たちから、わっと拍手が起こりました。嬉しかったですね。

(熊本大学, 『Kumadai Now』, 2016年7月28日号)

4月18日正午、本震から2日半、大学生にとっては4日ほど時が経過していた。そして、避難所の集団はリーダー層、担い手スタッフ、一般の避難者という区別はあっても、相互に繋がっている群れといえるかどうか、の検証が始まる。というのは、肉体的にも精神的にもメンバーの限界を意識した大学生たちは、自分たちが主導する本部の解散を発表し、今後は避難所にいる人たちが維持するよう求めたからである。にわか開設の避難所において群れが生まれていけば、スムーズに主役となるメンバーの交

替が生じるであろう。物資や情報をめぐる社会的ジレンマ状態に落ち込むと人々が危惧すれば、無秩序状態へと移行し混乱が起きるであろう。

大学生は解散の旨を伝え、続けて、みんなで一日のスケジュール表に沿った行動をとってほしいとの要望を伝えた。たちまち「明日から世話はどうなるのか」など、大きな非難の声が沸き起こった。すると、この騒ぎの声に反応して、多くは子育てママたちから、自分の子どもたちに言い聞かせる表現で、しかしながら大きな声で、「働かざるもの食うべからず」とか、「自分の身の回りのことを自分でできない大人になったらだめよ」などの声が次々に上がった。そうしたやり取りの中で、非難する声は消えていき、最後に冒頭に記された感謝の拍手へと続く(安部美和氏へのインタビュー時の発言, 2023年10月11日)。

ここで熊大黒髪の本拠地を振り返ると、自動的に情動的共感が浮上するのに適切な仕掛けをいくつも備えている。運営本部のあり方でいえば、定例化された会議は、避難している人々の目の前で開かれる。討議される題目やその内容の大半は、現場で発生している困難・課題であり、ボトムアップ方式で討議内容が決まる。討議を経て決定された事項は、肉声で伝えられると同時に、文章化して大きな紙で張り出される。留学生などの外国人に対しても専門の対応部所を設けている。また消灯時の放送をめぐって混乱が発生した後は、文章による英語情報の提供に加えて、英語放送も流している。多くの人は外部の情報を入手できない状態に置かれ、また、個々人が抱える個別の悩みも少なくない。これらの問題に関しては、7つに分かれた専門の部所に相談できる仕組みとなっている。

要するに、一般の避難者は運営の担い手に対して、被災者という立場の共有だけでなく、状況設定からみれば共感が立ち上りやすい環境に置かれていた。しかしながら、この運営環境は一般の避難者の間で援助行動を喚起しはしなかった。これをどう捉えればよいのか。

亀田氏の著書に引き付ければ、他者の身体的な痛みに対しては情動的な共感が対応し、社会的な痛みには、認知的な共感のプロセスが起きることになる。同時に、認知的共感は「いつでも温かくやさしい思いやり」を生むものではないが、仲間や内集団という狭い境界を越える利他性にとって欠かせないと主張する。さらに、異質な他者に対する利他性を担うのも認知的共感の場合が一般的だと指摘する(亀田, 2017年, p108, p109, p112)。

実際、一般の避難者たちからすれば、継続的な避難になると覚悟を決めて体育館に入室したときから、大学生たちはすでに担い手の立場にあったわけで、事態を的確に把握し、手際よく活動する異質な他者として映っており、そう認知していたといえる。それでは、熊大黒髪の場合、一般の避難者たちは認知的共感に促された利他行動、あるいは自分たちによる自主運営に乗り出さないのだろうか。解散宣言から後の展開を追いかけよう。

意思決定と現場の活動を担った大学生たちは退場し、その大半は親元などへ帰っていった。その一方、20人ほどは個人として支援し続けるために残っている。本部席には大学生に代わって、大学の事務職員と市役所職員が席を占める。とはいえ、大学生が解散する以前に定まっていたスケジュールと運営事項を、もっぱら事務的に処理するにとどまる。問題は運営スタッフの確保である。果たして様々な文化規範をも

つ人々が入り混じった避難所で、自主的な担い手が必要な数だけ現れるのか。翌日からは、決まった時間になると、構内放送で手伝い募集が呼びかけられた。すると、避難者の間から必要数を越えるだけの人々が集まった(安部氏へのインタビュー, 2023年10月11日)。少なくとも、社会的ジレンマは見られなかった。

(ii)

他者理解(認知的共感)と共感的関心が重なった場合、適切な社会的行動と結び付くことを示している。……認知的共感と共感的関心の間に介在する要因(条件)を明らかにすることが重要なのではないだろうか。

(櫻井・村上, 2015年, p375)

体育館内に避難滞在し続けていれば、大学生の身体的な活躍、柔軟な対応ぶりなどは目を覆わない限り飛び込んでくる。それらは情動的共感、さらには認知的な共感が刺激される要素をいくつも含んでいる。しかるに、一般の避難者たちからは彼らを助ける行動が次々に立ち上がってくる様子は見られない。そこには、どのような阻止作用が存在するのであろうか。この局面の照射と関係のある研究を3つ取り上げよう。

1番目は、認知的共感の性格を従来よりも踏み込んで分析した研究である。ここでは、2点の指摘が重要である。1点目は、認知的共感から援助・協力行動の発現までの心理プロセスは長く、途中にはいくつか攪乱的な分岐要因が存在する。そこで態度決定しだいで適切な、あるいは適切さを欠く社会的な行動が生まれてくる。2点目としては、他者の心理・心情を理解しようとする認知的共感それ自体は、価値中立的であって、必ずしも向社会的な行動につなが

らないとの見解である（櫻井・村上，2015年，p374，p376）。

2番目の業績は，緊急事態下にあっても，人間行動の基本的なパターンは日常のルールから引き出されるとの立場をとる。しかも，そこで注目するのは歴史的に形成された文化心理的な差異である。新谷優氏によれば，すでに共同体的な規範が崩れている都市であろうとも，相互協調的な文化の下で育ち，現在も暮らす一般の避難者たちは，明示的なサポートよりも暗黙のサポートを好む。この文化環境下にいる人々は，欧米人に多い相互独立的な文化下の人々と違って，援助行動をするかどうかの決定に際して，種々の外部要因から影響を受けやすい（新谷，2020年，p340，p342）。

3番目に取り上げるのは，櫻井・村上氏と同じく，自発的な利他行動が起きるまでのプロセスを検討する村田藍子・亀田達也氏らの業績である。彼らの作用関係のとらえ方は，櫻井・村上氏と逆である。通説的には半自動的に湧き上がる感情とされてきた情動的共感（情動的共有）が実は高次認知である認知的共感（視点取得）から強いインパクトを受ける。さらに，その認知的共感とは，さまざまな社会経済的な立場や見ず知らずの他者が入り混じった場においても，向社会的行動（利他行動）を引き起こすと主張する（村田・斎藤・樋口・亀田，2015年，p401）。

村田・亀田氏らの議論が興味深いのは，価値観や感受性が異なる人々の間でも，認知的共感によって相手の感受性に応じた情動的共感をうまく調整できるならば，向社会的行動を取りやすくなることの検証を果たしている点である（村田・斎藤・樋口・亀田，2015年，p396）。これに関連して，上田氏の論文が注目される。と

いうのは，情動的共感を引き起こす作用として，運動や体性感覚シミュレーションの積極的な役割を指摘するからである。つまり，そこには村田・亀田氏らの論述では触れられていない情動的共感に対する具体的な調整の手法を見いだせる（上田，2020年，p296）。ここに取り上げた一連の理論的・実証的知見は，大学生が降板した後の避難所に生み出された事態を合理的に説明するのに役立つ。

避難所に生じた変化は，大学当局・市役所の職員が事務的なマネジメント役を担当し，一般の避難者が担い手活動につくという役割分担が成立しただけでは終わらない。避難所全体を組織的に統一して動かす本部方式に代わって，小グループがそれぞれに，自分たちで企画する催しなどが現れ始める。そこでは，一部教員たちによる専門的なアドバイスをも受けて，専門性を生かすプログラムを大学生が拡充・新提案するケースも目立つようになる。具体例を挙げると，すでに作られていた子供たち向けの遊び空間では，各種の道具が持ち込まれている。また，ストレス軽減効果をねらって昼間にはクラシック音楽が流される。

なかでも，生涯スポーツ福祉課程の大学生たちの呼びかけで始まったラジオ体操が果たした役割は大きい。大学構内には避難所の外で車中泊を続ける人々も多く残っていて，日に日にエコノミークラス症候群の懸念が高まっていく。これを回避するために，体育館内のみならず敷地内の人々にも広く呼び掛け，1日2度，定時にみんなで行うラジオ体操が導入され，これが大きな評判を呼んだ。この事態転換をアドバイザーとして間近で観察していた安部氏は，次のように語る。滞在者の自発的なアイデアによる催しが相次いで催されるようになってから

は、しだいに日常の生活感が漂う感じになった(安部氏へのインタビュー, 2023年10月11日)。

## 2) 外国人への対応と「仲間感情」の壁

### (i)

地震の時、何が起きたか分からず家族と家の外に避難した。……(避難所についた際に)自分たちは財布、パスポート、大学院の修了証書をバッグに詰めているだけ……初めての地震、初めての避難所生活で余震は本当に怖かった。

(安部, 2019年, 166ページ)

熊本黒髪の避難所は、「仲間感情」の壁克服プロセスを明示的に検証できる点で社会的ジレンマ研究にとって興味深い。つまり、亀田氏の探求関心である「深い実用主義」の具体的な展開例を現場レベルで観察できる(亀田, 2017年, p166)。

熊本大学にはアジアからの家族同伴の留学生が多い。彼らは同じく相互協調的な文化であるとはいえ、イスラム教徒にみられるごとく異質な文化価値の規範で育っている(当時、最も多かったのはインドネシア出身の留学生)。その外国人たちは、本格的な運営の当初から明らかに目立つ「異質な他者」であった。1200人余の避難者のうち総勢185人に達したからである。集まって来た外国人たちは、ただオロオロするだけだった。しかしながら、その彼らを救出するために各国の大使館や JICA が何台もバスを仕立てて迎えに来た。そして、17日夕方までに約半数は福岡、広島へと移動していった(安部, 2017年 (b), p26)。

留学生たちが避難所にたどり着いたとき、彼らは心理面で困惑しきっていた。その場所で、彼らは他の避難者と同一の待遇を受けた。ただ

一つ、事実上、駆けこみ寺の役割を演じる「外国人対応」の部所があることを除いては。そこを窓口にして、彼らは自分たちを取り巻く流動的な事態や交通関係を中心にした外部情報を収集することができた。彼らがとりわけ深刻に悩んでいた情報入手に関する避難所の対応ぶりに着目しよう。

体育館内における情報提供は、当初、日本語だけでなされた。すると、消灯の際になされる放送内容が分からないので、「外国人対応」部所へ一斉に留学生たちが押し寄せて騒然となる。その反省から、放送も紙掲示板も2カ国語ですることになった。これにかかわるのは、海外留学を経験した大学生のみならず、英語を得意とする高校生たちである。

しばらくして、滞在する外国人たちが落ち着きを取り戻しはじめると、その部所の担当者として、自発的にスタッフ席につくようになる。この能動的な行動は、運営に携わる大学生の困難さを目にして沸き上がった認知的共感かと問われれば、違うとの答えとなろう。この時には、むしろ周囲の日本人社会との間に存在する著しい情報格差を埋めるために、情報入手で苦勞している外国人同士による相互助け合いである。つまり、外国人グループ内に発生した「仲間感情」の現れといえる。その外国人の態度が大きく変化するのには、大学生本部が解散した後に導入されたラジオ体操の実施である。

### (ii)

ラジオ体操はとても新鮮な体験で、私たちは避難所で初めてこの体操を知りました。身体を動かせる時間があるのはとても良かったし、日本人の避難者と一緒に運動できたことはとても良かったです。

(“416”編集委員会、『記録集』, p19)

亀田氏の著書には、外国人たちの行動変化を分析するうえでの手がかりが2つ登場する。1つ目は未知の相手を助けるケースであり、2つ目は他者の心を理解するためにマネをするケースである。前者は「二者に閉じない助け合い」であり、間接互惠性と呼ばれる。ヒトに特徴的な間接互惠性を支えているのは、他者による評価の働きではないかと説明される(亀田, 2017年, p81)。この点について、一次的避難所の滞在者を対象とする本稿の場合、確かめようがない。

2つ目のマネをする身体についても、ほとんどは無意識的に、自動的に起きる現象だが、そこには、相手の「心的状態」を理解しようとするメカニズムが働いていて、身体化された認知と呼んでいる(亀田, 2017年, p92~93)。ここで、先述した上田氏には亀田氏の議論を一步進める発言が見られる。他者を助ける行動ポテンシャルの発現に際して、身体の運動で喚起された情動が重要な役割を果たすと述べる(上田, 2020年, p296, p299)。実は、亀田氏は他のメンバーと共同して、自発的な利他行動が起きるまでのプロセスを分析している。それによれば、認知的共感は見ず知らずの他者が入り混じった場において、向社会的行動(利他行動)を引き起こす。ポイントとなるのは、認知的共感の視点に立って相手の感受性に応じた情動共有をうまく調整できるかどうかである(村田・斎藤・樋口・亀田, 2015年, p401)。この両者の考察見解を重ね合わせた事態が外国人たちにとってのラジオ体操効果に見出せる。

初日、全員が一斉に立ち上がり、同じ動作を繰り返す光景を目にした留学生たちは、驚くばかりであった。その彼らに大学生が見本を見

せることで、不安そうに見ていた留学生たちも次第にラジオ体操ができるようになっていく。やがて外国人たちはその運動がとても気に入って、中には外出していても、体操の時間に避難所に戻ってくる留学生まで現れる。身体を動かす活動そのものと同時に、同じ避難所においても日本人と交流のなかった彼らは、体操を通して初めて日本人とコミュニケーションが取れたと感じて喜んだ。話はここで終わらない。やがて留学生たちは自分たちが提供できるプログラムを次々と持ち出すようになる。具体的に挙げれば、ハラルカレーの提供、外国語教室の開催、自主映画の上映などである(安部, 2017年 (b), p20~21)。

(iii)

「熊本大学のお兄さん、お姉さん、……夜まではたらいとござってありがとうございます。ぼくは(将来)熊本大学に通って先生になりたいです……」避難所閉鎖の日に、大小の文字が入り混じってゆがんだ文章の並ぶ手紙を読んで、アドバイザー役の安部氏は、大学生たちと一緒に号泣した、と記す。

(安部, 2021年5月25日号, p2)

これまでの展開を踏まえて、熊大黒髪に避難した人達の間で起きた「仲間感情」との向き合い方を振り返ろう。大学生が表舞台から降りた後、避難者たちの行動は2段階で変化している。同じ文化的心性にある日本人の避難者たちは、当初から大学生に対して認知的共感の働きかけで情動的共感が立ちあがってもよかつたはずである。しかしながら、メリハリの利いた活躍ぶりを前にして暗黙のサポートが支配的となった。その消極性を断ち切ったのが、大学生による本部の解散宣言だった。宣言の場にいた

日本人の避難者は受動的能動の立場に追い込まれ、それまでの数日間で潜在的に高まっている情動的共感に促されて、助け合いの行動に移っていった。

他方で、同じく相互協調的な文化に属するとはいえ、明瞭に異なる価値文化の下にあるアジアからの留学生たち。事情の分からない避難所生活を続ける彼らにとって、日本人の行動ルール習得の上に成立する認知的共感を喚起することは、とても難しい。それゆえ、助け合い行動に立ち上がるほど十分には認知共感によって調整された情動的共感が高まらなかった。この環境を一気に転換させたのが、みんなで一緒になって体を動かすラジオ体操である。この体操への参加は、まだ低い水準にあった情動的共感を一気に高める呼び水となった。この全員が参加する身体運動は、異なる行動ルール下にいる留学生たちに、他の避難者たちとの感情の共有を可能にさせた。そこから、自分たちが保持している日常的な文化行動のうちにも、一般の避難者に役立つ活動があるはずだとの役割取得の視点が生まれる。かくて、自分たち流に色付けされた認知的共感による調整を受けて、喚起された情動的共感に後押しされた活動プログラムが提案されてくる。

ここで2つの避難者集団の行動を対比すれば、日本人の避難者は、心の内部にある認知的共感を実際の活動に転嫁させるに際して、追い込まれた自己認知が媒介役となっている。その一方で、留学生の側をみると、一緒に行う体操に突き動かされた好意的な共感感情が身体化された認知的共感を経由して協調行動を引き出している。つまり、文化的な価値意識の違いが協力行動を喚起する経路に差異をもたらしている。ということは、2つの共感性のいずれが先

かではなくて、外からやってくる作用が自分たちに向けられたと感じた時点が、行動の起点となっている。これは、郡司所説では受動的能動と位置づけられる。

そこに生まれた事態は、外国人たちが自己を「異質な他者」だと了解したうえで、自己の文化規範との接点を探り、避難所の居住環境をより楽しくする方策を探ったことに他ならない。それ故、亀田氏に引き付けられれば、「仲間感情」の壁を越えたといえよう。

これらの展開を少し長いタイムスパンで見ると、互いに違った文化規範を身につけた者同士が、それを認め合って交流していく場の創出を目指したといえる。つまり、4月30日の避難所閉鎖にいたるまでを取り上げれば、当初、大学生と一般の避難者、日本人避難者と外国人避難者というように、いくつもの「仲間感情」の境界を内包した状態から出発して、運営の過程を経ることで「協力する社会」づくりが進行したことになる。

付け加えれば、大学生主導の本部の解散後に、本部席についた人々による現場マネジメントの機能は明瞭な低下が見られたとはいえ、全体としては個の自由と共通目標の追求を両立させる群れ行動が保持されている。つまり、社会的ジレンマが発生する要素を抱え込んだ避難所は、亀田氏の「深い実用主義」がめざす「仲間感情」の壁克服にとって、1つの解答事例を提示したことになる。別な見方をすれば、それぞれのグループが育つ過程で身に付けた「仲間感情」から、共同の身体運動を通して、顔の見える空間内に新たな「仲間感情」が登場したと言えるかもしれない。

ここまでは、種々の「仲間感情」が入り混じった集団において、「深い実用主義」の実践

例について検討してきた。とはいえ、まだ検討すべき課題が残されている。それは、なぜ大学生たちがこれほどまでスムーズに、避難所の内部にも、また外部に対しても開かれた本部を立ち上げ、運営できたのかという疑問である。

その疑問の検討に当たって、本稿は細田聡・井上枝一郎氏が提唱する緊急事態下の行動連続説に立つ。両氏は、先行文献をたんねんに調べる。すると、緊急事態が発生したからといって、特別な情報処理モードへの切り替えが起こることを示す証拠は見いだせない。むしろ逆に、平時に用いてきた手法の近似解に相当する選択がほぼ自動的に浮上してくる傾向を見いだせると、結論づける（細田・井上，2000年，p 533）。この説に依拠する本稿が検討の対象に据えるのは大学サークルである。スムーズに運営本部を立ち上げたリーダー層が日常に活動している大学サークル。そこでの役員たちと一般メンバーの関係に着目する。

## 6. 大学生のあいまいな自由と大学サークル

### 1) 大学サークルの諸要素および個と集団の関係

#### (i)

スケジュール化された高校生活と比べると、大学は自由がいっぱいです。しかし、……一般的に合意された価値観や信念がなく、選択の指針とする実践的な知識がない場合、あまりに多くの選択肢に耐えることは困難でしょう。……新入生にとって、お気に入りのクラブやサークルが見つかって、先輩や同輩との付き合いがスタートすれば、上述した悩み困りごとの多くは解決する

(杉田，2022年5月)

大学のサークル加入理由を調査した最近の研究が注目される。活動志向、成員志向（同好の人同士の付き合い）という従来から知られてきた理由に加えて、緩さ志向という新たな側面が導出されている。サークルに加入しても、傷つけられることや傷つけることを回避する対人関係のあり方を求めるからだと説明される（高田，2017年，p36）。

すでに大学サークルを扱ったかなりの数の文献が発表されている。しかしながら、これまで「緩さ志向」にはほとんど目が向いていない。というのも、発表された文献の大部分は、「大学教育とは独立した自主的な運営がなされる」点に着目はしても、人間的に成長を遂げていく機能を担い、総体としての大学が果たすべき役割を補完するという理念と整合的な研究だからである（則定，2019年，p156）。このためデータは発表されていても、「サークル集団における人間関係に焦点を当てた研究はほとんど行われていない」と指摘される（橋本・唐沢・磯崎，2010年，p86～87）。

そうした研究動向に照らせば、多様な人々が突発的に集まる避難所に「協力する社会」を築いた大学生のパワー源を探求する本稿は、逆に、サークル集団の人間関係、とりわけ一般のメンバーと役員などのリーダー層の関係に焦点を合わせるアプローチとなる。すると、そこに大学生だからこそ許される欲張りを追求する際に、不可避的に現れる難題が見えてくる。

まずは個人の側に着目すると、大学生になって初めて手にした大きな自由と、それを失わずに、しかも自分の興味を抱く特定の活動分野で仲間といっしょに、従前やれなかった才能・能力磨きにも挑戦する。しかるに、同じ種類の目標を有する大学生たちがひとたびサークルを結

成して共同行動をとろうとすれば、集団としてのもろもろの制約や各人の意思決定尺度の違いなどが表面化する。サークルとの向き合い方をめぐる個人間の差異、それをどう調整するかがサークルの人間関係に他ならない。

その際、大学外の社会では外側からの諸規制による拘束度が強いのにに対し、大学サークルの場合は、他者に縛られる度合いが少ないし、決定を急いで下す必要もない。つまり、人間関係に悩み、どれだけの時間をかけて処理するかも個人の自由に委ねられている。この大学生活のとらえ方は、上記の杉田氏の見解と明確に異なる。本稿の接近関心を支持するのは、学部の卒業研究でサークル集団（内部の行動制約が強い部活動は除外）を採り上げた高橋唯氏である。彼女は自己の行動を振り返って次のように語る。「入学当初は複数の学内サークル集団に所属していたが、最終的に引退まで所属していたサークル集団は1つであった。それはおそらく、集団に対する魅力や集団に対して求めていたもの、もしくはそこで人間関係など、複数の要因を検討した上で選択を行った結果であろう（高橋、2017年、p3）。」

個人の抽象的なレベルでは、自由をベースに結成する大学サークルは、自由であるが故に内に分解に向かう緊張関係をはらんでいる。それだけではない。客観的な存続条件そのものが不安定な構造になっている。その枠組みを概観する。

入学すると多くの大学生が関心を寄せるサークルは、活動条件として大学側から種々の制約を課されることも多く、そうかかと思えば、一部には実質的に資金的な支援まで受けるケースも存在する。個人レベルにとっての大学サークルは、新たに入手したふらつきの多い自由な世

界を可視化させる機構であり、一度入った仲間も、活動の状況次第で退会する。何よりも、メンバーの活動期間が短い。学部は原則的に4年間だが、就職活動が本格化すると中心的な担い手から外れる。その活動が早期化していて3年生の後半に始まるとすれば、運営の中核を担う役職層は、2年生の後半に就くことになる。入学後に身体技能や趣味の世界について習い始めてから1年半経つと、すでにサークルの中心的な担い手になって、後輩たちと向き合う世話役となる。この短いサイクルに合わせて、新入生をどれだけ確保できるかが、安定した存続にとっての1つのカギといえる。ここまでは、単独サークルの循環である。

次に大学サークルの活動を全体としてとらえる局面へと視点をずらすと、それぞれのサークルは、メンバー獲得に関しては、お互いに競争相手である。その一方で、新入生たちに大学生文化への関心を高めてもらう取り組みや、大学から規制の緩和を勝ち取ったり、支援を増やしてもらうためには、サークル団体全体の協力が求められる。つまり、傘となる組織を設置することが合理的である。それゆえ、一度役職者としてリーダーの立場になってしまうと、彼らは各サークルの内外で、多面的な任務を引き受けることになる。

上記の枠組みに依拠して繰り広げられる広義のサークル活動は、実に多彩で種類、活動時間、行事の多少、メンバー拘束の度合いなど、いずれも大きなばらつきが存在する。その上に視野を広げれば、大学サークルは専門的研究、必修事項の学習、アルバイトといった諸活動と肩を並べる一部門を構成している。つまり、個別のサークルは、激しい競合関係にさらされつつ、緩さ志向の大学生から選ばれなければならない

(浜島, 2018年)。それでは、一般の大学生は個別サークルとどのように向き合うのであろうか。

あいまいな判断基準でとりあえず加入した新メンバーたちではあるが、実際にサークルに参加して、当初の想定とは違った実情に戸惑う大学生は少なくない。発表されているデータを用いれば、サークルに所属しながらも半年間で行事活動を経験していない大学生は3割以上、所属はしているもののサークルをやめようとする大学生は3割以上いて、所属していながら活動に参加しようとしないうる者も数多く存在することが問題にされている(高田, 2018年, p85)。

期間限定の役職者たちは、移り気で分散傾向にある一般メンバーを前にして、凝集力を高めてより魅力のあるサークル集団にしようと企図する。そこには大別して、強力な指導力を発揮して、共通目標へと牽引していく道と、一般のメンバーたちとより親密な関係を築き、彼らからの自発的なサポートを受ける道の2つの方式が存在する。日本のサークル・リーダーたちは、どちらを選択するのであろうか。

(ii)

皆が使える「共通の通貨」……を、「どこにあるべきか」ではなく、実際に「どこにあるか(あり得るか)」の観点から求める深い実用主義……こそが必要である

(亀田, 2017年, p165)

熊大黒髪の避難所リーダー層を構成したのは、各種学生団体の代表者たちである。すなわち、彼らは日常の大学生活においてリーダーシップを発揮している。近年、日本の大学においても「大学憲章や理念でリーダーの輩出を謳うのみならず、リーダーシップ能力をアウトカ

ムの1つとして掲げる」大学が現れている(泉谷・安野, 2016年, p59)。これを受けて泉谷道子・安野舞子氏は、大学生のリーダーシップ能力を高める教育的介入の開発を目指す関心から、リーダーシップがあると周囲が推薦する人々(大学生と若い社会人)を対象にして調査を行う。

彼女たちの検討結果によれば、大学生たちは誰も5段階に分類された発達過程の最高段階に到達できなかった。その理由について、最高段階に達するのに欠かせない経験(自己の信条や生き方を再検討するような痛みを伴う出来事)は、「同年代の少人数集団での活動では得られ難い」からだと説明する。同時に、彼女らは本稿にとって興味深い発見をもしている。米国の先行研究を参照する彼女らは、リーダーシップにも文化特性があると述べる。米国の大学生たちと違って、日本人大学生たちは、特定の集団内でのリーダーシップ行動から自己効力感を抱きはしても、それが汎用的な能力の証とはとらえない、と指摘する(泉谷・安野, 2016年, p67~68)。ここには、日本のサークルの場合、代表などのリーダー層への就任は周囲からの推薦や説得があつて、それを受入れるスタイルが一般的だという事情が反映している。

ところで、彼女らは米国と日本の大学サークルが育てるリーダーシップそのものは同質だと想定している。類似した研究関心は、役職者たちの抱える困りごとを調べた横山孝行氏の調査分析にも見いだせる。役職者たちの困りごとを取り出してみると、大学側の提供する資金面の援助・施設整備などではない。また、忙しさ(10.6%)、リーダーとしての自信のなさ(14.9%)といった本人に直接関係する事項も、それほど高くない。それらよりも重要な案件

は、所属メンバーが少ない(21.3%)、集団としてのまとまりが悪い[各人の勝手なふるまいぶり、メンバー間での活動に対する熱心さのバラつき、活動への参加率が低いなど](40.4%)である。横山氏は、このデータからサークル内の役割分担の不十分さやコミュニケーションの弱さを見て取り、役職者が集団の運営方法を知らないことに原因を求める。それへの対処策としては、社会的スキルのトレーニングを提案する(横山, 2011年, p13)。

横山氏の研究関心からは、泉谷・安野氏と同じく、汎用的な能力としてのリーダーシップを養成する方向が取りだされる。そこでは、相互独立的な文化のリーダーシップである説得力・先導的統率力などといった個人的能力が尺度となる。このアプローチからは、米国流のリーダーシップとは全く別類型である相互協調的な文化型のリーダーシップを育む日本の大学サークルがもつ面白さは、全然射程に入っていない(新谷, 2020年, p 342)。日本のサークル・リーダーたちは、様々な方面に手を出すことを通して自分探しをするという一般の大学生の自由さと、特定のサークル団体を存続・維持させる課題を両立させる役職者任務の難しさを直視している。そして、この難題を解決する方途をひねり出せば、自己の成長、言い換えれば、リーダーの任務を果たした達成感を覚える。横山氏にはこのプロセスが見えていない。

ここで、どのようなメンバーが役員に推されるかに目を向けよう。それは周りからみてサークルに強い愛着を感じ、深くコミットしていると判断される人たちになる確率が高い。ところが、役職を引き受けてマネジメント関連の活動が一挙に増えると、本人たちはそれまでの「情緒的コミットメントが低くなる」ほど、サー

クルへの関わり方が変化する(高橋, 2017年, p17)。つまり、役職者たちは一定期間、ある程度まで本人の自由を放棄してでも、個々のサークルを維持・拡充させるマネジメント活動に励んでいる。

そこには認知的共感が立ちあがっている。その立ち上がりは、個人の心理としては情動的共感から認知的共感への移行である。その一方、集団リーダーとしての責任感の点では、一般メンバーの関心に合わせて、彼らから賛同をえる活動パターンを見つけ出そうとする。要するに、役職者たちは自由を保持する一般メンバーの関心に注意を向け、いかに活動のプランを立てるかについて日常的に腐心している。この時、役職者たちの任期に着目しよう。彼らは原則1年で交代し、次の世代にバトンタッチする。野球で例えれば、先発完投型の仕事ではなく、基本的にリリーフの仕事なのである。わずか1年間のリーダーシップ経験で、自己の中でどこでも通用する汎用的能力を見いだせたと、自信をもって発言できる大学生はどれだけいるだろうか。

ところで、泉谷・安野氏によると、大学生のリーダーたちが特定の集団内で自己効力感を覚えるのは、諸々の行事の運営経験である述べる。高田氏は、諸行事がもたらす心理的な効果について調査している。彼の分析を見れば、行事活動は一般メンバーにとってもサークルへの適応感を高める機会となっている。その一方で、一般のメンバーと役職経験者の間で心理的な成果の獲得されやすさを調べると、双方の間に有意な格差は認められない。その理由として、他者統率の熟達や問題解決への積極性という因子は、リーダーシップの発現ではなく、当人の成長として自己評価されていると、高田

氏は述べる（高田，2018年，p83～85）。大学生による自己評価に関しては，他の調査研究においても同様な評価分類が見いだされる。つまり，期間限定の役職につく人たちが造り上げる企画は，本人にとって大学生活において出会う各種の新しい経験の一部に包摂されていて，自己の成長要素の1つと位置づけられている。結局，サークル加入者にとってリーダー層となってメンバーの凝集度を高める活動は，特別な才能の有無と結びついてはいない。

(iii)

ダチョウ倶楽部の非同期性：

……熱湯風呂があって「入るひと～」と聞くと，皆ハイハイって手を挙げる……（でも）最後に手を挙げた竜平が，……なぜか入ることになってしまう。（これは，微妙な）時間的なズレがあるから。

能動と受動は非同期的な時間によって，能動的受動，受動的能動，能動的受動的能動……など，関係を内包させて区別しながら区別を無効にする。

（郡司，2019年（b））

2011年に大学サークルの役職者たちが抱える困りごとを調べた横山氏は，役職者への研究関心を維持し続け，2016年にはリーダーとしての自信が高まる要因について調べている。その調査は，サークル集団から受けるサポート，および組織風土（メンバーの行動規制に対する度合いを示す管理風土と，選択の自由度で測られる開放性風土で構成）の2つの評価分野が対象である。意外なことに，開放性風土がリーダーの自信につながらず，管理性風土を促進することが自信を高める（集団内の階層性や役割分担が厳格に定まっているケースだと自信がつく）と

なっている。

もう1つの調査において，役職者がサークル員に種々のサポートを提供できれば自信がつくのではなく，逆に役職者は，集団全体や個々のメンバーから豊富なサポートを得られた場合に自信を高めている。つまり，登場する役職者たちは自己の指導力の高さではなく，メンバーから支援をたくさん取り付けられれば信頼されていると受けとめ，自信を深めるタイプなのである。この興味ある事態を摘出しておきながら，横山氏はリーダーとして自信のない役職者への対処策に話を進めて，お決まりの研修会の開催や顧問・監督による指導の手ほどき提案に終わる（横山，2016年，p 7～8）。要するに，サークルのリーダー層に着目し続けながらも，彼らがいかにして集団内部から押し出されてくるのか（受動的能動の局面），役職に就いてから果たすべき役割，さらにメンバーとのコンタクトのあり方といった個と集団の相互作用の特性解明へと関心が深化することはない。

そこから，同様な問題局面に別なアプローチで臨む郡司氏らのグループに目を転じると，彼らは群れとしての社会性と個体運動の多様性とこの両立というテーマに絞り込んで，長年にわたり研究を続ける。これまでの主要な研究対象が動物であったこともあり，一見大学サークルとは関係がないように見える。しかしながら，郡司氏らに言わせれば，動物対象の研究も，社会学におけるテーマ「個人の自由と社会性の両立」と同じ論題だとなる。

彼らの議論は，問題を扱う共通の舞台を設定することで終わらない。従来の研究において自由と社会性の両立は，これまで，カオスの縁でのみ見出されてきた。しかも，それは「きわめて脆弱で，生物に認められる頑健性がない。」

こう問題を整理して、彼らはこの弱点に対処できる新しいモデルを提出する。そして、非同期と予期（すでに知っている過去を未来のように扱う錯誤）で実装化された群れモデルであれば、環境の変化に動じることなく、いたる所で社会性と自由を両立させられる、との結論に到達する（郡司・村上，2020年，p111，p113，p117）。

彼らの解明によって、サークルのメンバーとリーダーで構成される不安定な群れ集団が、突発的な新型コロナの流行など種々の困難に見舞われながらも、しぶとく存続し続けている事態が理論的に根拠づけられる。実際、本節で吟味してきた大学サークルの脆さ、リーダー層のリリーフ型投手に似た役割、一般メンバーとリーダー層の関係などから生まれる特性は、群れの行動についての理論的な説明と合致している。

大学サークル運営の視点から熊大黒髪の本部に座った大学生たちの行動を評価すると、彼らは、一般メンバーとの向き合い方を基本的に採用している。そこでの大学生たちは、認知的共感に立脚して考えつく限りの諸アイデアを企画し配慮を行っている。それと同時に、一般の避難者に自分たちと一緒に活動するように訴えている。この相互関係に対する要求は、サークルメンバーに求める行動と同じである。

他方で一般の避難者たちは、短時間の滞在に過ぎず、彼らの間に共感性、とりわけ認知的共感性が十分に喚起されるだけの経過プロセスが伴わなかったが故に、一般の避難者による運営本部の交替には至らなかった。全体としてはこう結論づけるにしても、避難所に群れ行動を出現させようとする大学生の働きかけは、次第に一般の避難者たちの間に浸透していく。その1つの到達点が外国人グループによる相次ぐ自主

企画の実施である。それは滞在期間中に発生した親密感情を伴うコンタクトにより、異質な文化価値の下にある人々の間に、避難所運営に対する視点取得が芽生え始めたことの意味といえよう。

## 2) 認知的共感と大学サークルの社会的な位置

（1951年の）フィン論文は序論の他、七つのトピックで構成されている。……五番目の「学生ニーズと現実」……では、日本の大学が学生に対して無関心であった状況が言及される。……あらゆる点で支援を欠く実態が指摘され、学生の意見を正しく反映する手段を欠いていた（戸村，2023年，p221）

深い実用主義を採求する亀田氏は、冷たい計算に基づく功利主義を採求に当たったの思想的武器として選ぶ。その根拠は、人々の平等を前提として「幸福」の総量を最大化できるからである（亀田，2017年，p164）。そして、それを推し進める武器には認知的共感を用いる。現実の災害対応を分析するうえでも、この路線は重要である。

というのも、近年、災害対応の分野で積極的に発言を続けている社会関係資本論の研究者たちは、地域コミュニティに埋め込まれている資源として、情動的共感と歴史的に形成された文化規範が絡み合う「仲間感情」を肯定的に評価しているからである（例えば、黒木誉之，2020年）。その際、このアプローチは、強力な「仲間感情」の壁を伴うという裏側の側面をしばしば見落とす。熊本地震で外国人被災者に一貫して熱い視線を注ぐ安部氏は、裏側の事態が発現するケースについても鋭く描き出す。

彼女が取り上げるのは、熊本大学の大学生たちと共にボランティア活動に入った熊本市内の

仮設住宅団地である。仮設住宅に入居する人たちのなかで、住民たちは一定水準を超える被害という共通点を抱えている。それ故、相互の間には情動的共感が立ちあがりそうに見える。この団地の場合は、団地周辺に住んでいた被災者たちが先に入り、他の団地を希望したが抽選に漏れてしまった人達が後から入居した。つまり、構成住民は従前からのコミュニティ関係の有無でもって、居住区が二分されてしまった。すると何が起きたか。相互の間にはピリピリした雰囲気張り詰めて、相手方を「A棟のひと」、「B棟のひと」と呼び合う。そして、1年が経った頃でも交流は生まれていない（安部、2020年、p15, p20）。ここには、亀田氏が重視する壁が道路を挟んで高く築かれてしまっている。

この状況を前にすると、より高い「仲間感情」の壁が出現して当然の熊大黒髪において「協力する社会」が立ち上がったことの鮮やかさが際立つ。この相違が生じたのは、一般の避難者を迎え入れた大学生たちが、彼らを平等に遇する態度を常日頃の活動において身に付けていたからである。それでは、一般の避難者を前にして、彼らは凝集性の高い避難所を創出できると見込んでいたのだろうか。彼らがそう予期したとしても、それは非現実的な願望にすぎない。

避難所暮らしと学生生活ではいくつも相違点があるものの、すぐに分かる違いは次の二点である。4年という比較的短い期間だが、大学生にはその期間を目いっぱい使って自由を享受したいという強い願望がある。そして、役職者を中心としたメンバーの多くは、自己の属するサークルを長く存続させようとする明確な意欲がある。それをかなえる役職者たちは、一般メンバーの意見に耳を傾ける。その一方、一度きりの避難所には仕方なく滞在しているわけで、

条件さえ整えば早く退出したいと、避難者たちは願っている。この埋めがたい方向性の違いにもかかわらず、避難所で「協力する社会」を出現させたことは、ラジオ体操を媒介にした交流の効果が大きいといえる。

ここまでは、もっぱら大学サークルを対象を絞って考察をすすめてきた。けれども、学生生活は多面的に構成されている。大学生の生活に占める大学サークルの大きさしだいで、サークルの演じる役割を過大評価している懸念が残る。この側面の検討に関しては、浜島幸司氏らによる調査が21世紀に入る前から継続的に、幅広い活動を対象にして実施されている。

彼らの大学生文化についての調査によれば、大学生の8割以上が入学後に価値観が変わったと答えている。部・サークル、学業、アルバイトといった各分野にわたって活動パワーが高いタイプに、価値観が「変わった」回答をする者が多い。そして、生活に占める活動の比重を較べると、部・サークルは、友人との交友よりは低いものの、学業・勉強やアルバイトよりも高い水準にある。これらのデータを踏まえて、浜島氏は、部・サークルが「インフォーマルながらもキャンパスライフに大きな影響」を及ぼしている、と結論づける（浜島、2018年、p35～39）。それでは、自由と集団としての目標追求を両立させる大学サークルの学生文化は、いかにして生まれたのか。大学生が自ら闘いとしたのか。それとも、新制大学への改革の際に米国から持ち込まれたのか。そのいずれでもない、戸村理氏はフィン論文に依拠して説明する。

占領軍は旧制の大学制度を十分理解することなく、米国モデルを踏襲させた。そのやり方では、大きな制度転換を遂げさせることはできて

も、旧制大学以来の教授職が保持する慣習、まさにエートスを変容させることはできなかった。このため、大学には教員が主体だとする旧制大学の慣行が強く残った。また、種々の学生支援を求める米国の思想は理解されず、大学生の人間的な成長についてもインフォーマルな手段に大きく依存することになった（戸村，2023年，p221～222）。

事実経過から見れば、大学生たちは新制度への移行に積極的に関与する機会をいっさい与えられていない。彼らは、二重の意味で外の世界から押し付けられた事態を前にして、ただただ受け身に対応しているに過ぎない。教授たちのエートスが保持する大学教育の外側に生まれた空白を、自己流で豊かな想像を働かせて埋めていく。そうやって、新しい大学生たちの気分と感性にかみ合ったサークル活動が育ってきたといえる。

公式の大学制度が許しているという点で、表側とつながってはいる。とはいえ、自分らで勝手に運営スタイルを決めている大学サークルは、表とほんやり繋がっている運営スタイルの在り方だという点で、郡司氏が唱える天然知能の特質と二重写しである（郡司，2019年（a），p42）。現代の大学サークルは登場時の位置づけやその育ち方から見ると、大学制度にとってニッチな存在だったとさえいえる。その大学サークルは、大規模災害の多発する日本で、外に開かれた21世紀タイプの避難所運営という観点に立った時、多勢の避難者を一つにまとめていくための大きなポテンシャルを保持している。

## 7. 結び

ヒトは生き残りのために群れを作ると、研究者たちがいう。それに対して、今日の大学生たちは、気ままな自由を楽しむために群れを作る。その両要素が熊大黒髪の一次避難所で出会う。これが避難所を主導した大学生たちの行動を学問的に探究する本稿の基本的なフレームワークである。

共通する文化価値という「仲間感情」の基盤がない都市型空間に開設された避難所で、閉鎖までの半月ほどの間に「協力する場（社会）」が築かれた。けれども、熊本地震の対応を取り上げる諸専門研究において、この驚嘆に値する避難所が取り上げられることはほとんどない。

予め対応準備が組み込まれたいくつもの避難所がずっと混乱し続ける。そうした事態下にあって、熊大黒髪の避難所が外国人グループをも巻き込んで「協力する社会」を出現させたのは、なぜか。本稿は、集まった人々に大学生たちが群れ行動の活動スタイルで対応したからだとの見解を提出する。そして、群れ理論を提唱する郡司氏の所説に沿って、避難所の運営を吟味する。

この時、彼の所説の多くが実験型モデルに基づく研究になっているのに対して、本稿の考察現場は内外の社会と複雑に絡み合っているが故に、共感研究を中心とした多分野の研究成果が補助線として必要となる。そのため、論述は節ごとに種々の説明要素が入り交じり、スムーズな記述展開にはなっていない。これはある面で、亀田氏が覚悟する探求の進め方、つまり「あくまでも折衷（妥協的）」な道を連想させよう（亀田，2017年，p165）。この雑食的な議論の進め方にもかかわらず、熊大黒髪の避難所

の運営が群れ行動と合致するという運営観察と、その実現の背後には大学サークル活動の日常的な構造があるとの本稿の仮説そのものは、しっかりと裏付けられていると確信する。

この時、避難所の運営を担ったのは大学サークルのメンバーが中心であった。普段のサークル活動から掘り出されるのは、自由を手放したくない移り気な加入者と、その時々のお好みを反映しながら共通目標を追及する役職者・リーダー層との関係である。とりわけ、不安定な存立基盤の上で短期間に交代していくリーダー層のあり方は特記に値する。この絡み合いの中で、大学サークルは維持されている。そこには、学生生活内における群れの再生産構造が見いだせる。

この活動スタイルが大学生活で定着しているからこそ、熊本地震という突発的な事態に遭遇しても、一般的な避難者と良好な関係が築けたわけである。もっとも、避難所の場合は、できるだけ早く解消することが目標であり、サークル活動とは目ざす方向が逆である。しかしながら、マンパワー不足、現場にとってのマニュアル不在という強い制約条件は、被災直後に必ず出現する。その際に、大学サークルに内在している群れ行動がもつポテンシャルは大きい。

熊本地震の経験は多方面から分析されている。その1つとして、災害対応の関係者が大学に目を向けるケースでは、「大人たち」が主導し活躍した熊本学園大学のケースに集中する。その関心の外側に位置する熊大黒髪避難所は、もし現下の日本社会が探し出さねばならない解決策、あるいは社会科学的な新展開という課題関心に立脚すれば、仮説探究の素材として興味深い。それと同時に、大勢の、しかも多様な避難者が発生する都市型の災害時に、大学が

支援ポテンシャルを活用して地域に貢献することは、重要な社会的使命の1つであろう。これは熊大黒髪の避難所運営を担った大学生たちが、疲労しきっているにもかかわらず、避難所閉鎖の翌日から記録集の発行を企図した意図でもある。

## 【付記】

本稿の執筆が終盤を迎えつつあった2024年1月1日夕刻、能登半島に大地震が発生し甚大な被害が生じた。避難した大勢の人々に従前の災害時よりもずっと改善された避難環境が提供されることを、切に、切に願いながらの執筆であった。

本稿の執筆にあたっては、安部美和氏（東海大学文理融合学部）から貴重な支援を受けた。また、研究仲間である大渡昭彦・石原田秀一の両氏からは、本稿の執筆を強く促された。記して感謝する。

## 〈参考文献〉

- 安部美和「平成28年熊本地震 熊大黒髪避難所運営記録集『416』」『法学セミナー』Vol.62, No.6, 40-42, 2017年 (a)。
- 安部美和「熊本地震の経験からみる避難所運営と外国人避難者対応」日本災害復興学会『復興』Vol.8, No.2, 24-30, 2017年 (b)。
- 安部美和「熊本地震後の学生ボランティアと大学周辺住民との関係構築の課題」『熊本大学政策研究』9号, 161-172, 2019年。
- 安部美和「応急仮設住宅からみた被災者の動向—熊本市南区藤山仮設団地での活動を通して—」『復興』Vol.9, No.1, 15-20, 2020年。
- 安部美和「熊本地震から5年経って思うこと」JSDDR『News Letter』Vol.29, 2-2, 2021年5月25日号。
- 青山貴洋「災害時初期段階の良好な避難所運営をめぐる地域力と共助組織に関する論考」『公共政策志

- 林] 6巻, 39-54, 2018年。
- 馬場新一・三矢裕・国部克彦「熊本地震避難所運営に関する課題と対応」, 神戸大学 Discussion Paper, 1-6, 2017年。
- 大門大朗・渥美公秀「災害後の被災地における被災者と支援者の関係を考える—2016年熊本地震における災害ボランティアセンターの事例から—」『災害と共生』2巻1号, 25-32, 2018年。
- 郡司ベギオ幸夫「ダチョウクラブに群れの原理を見出す」YUKIO PEGIO GUNJI LAB. [http://www.ypg.ias.sci.waseda.ac.jp/\\_userdata/%E3%83%80%E3%83%81%E3%83%A7%E3%82%A6%E3%82%AF%E3%83%A9%E3%83%96%EF%BC%BF%E7%BE%A4%E3%82%8C.pdf](http://www.ypg.ias.sci.waseda.ac.jp/_userdata/%E3%83%80%E3%83%81%E3%83%A7%E3%82%A6%E3%82%AF%E3%83%A9%E3%83%96%EF%BC%BF%E7%BE%A4%E3%82%8C.pdf), (2024年1月16日に参照)。
- 郡司ベギオ幸夫「群れは意識を持つ 個の自由と集団の秩序」PHP 研究所, 2013年。
- 郡司ベギオ幸夫『天然知能』講談社, 2019年 (a)
- 郡司ベギオ幸夫「郡司ベギオ幸夫先生『天然知能』を語る」web マガジン『かんかん』, 2019年6月7日号 (b)。
- 郡司ベギオ幸夫・村上久「普遍的臨界性によって実現される頑健な群れ」『計測と制御』59巻2号, 111-118, 2020年。
- 郡司ベギオ幸夫「社会イノベーションをめぐる考察 (Part3)」『日立評論』, 2023年3月25日。
- 浜島幸司, 『「部・サークル活動」と大学生文化』『武蔵野大学教養教育リサーチセンター紀要』Vol.8, 27-39, 2018年。
- 花田昌宣「インクルーシブな避難所と水俣学の経験—地域に根ざした学と社会運動』『現代思想』45巻8号, 96-104, 2017年。
- 橋本剛明・唐沢かおり・磯崎三喜年「大学サークル集団におけるコミットメント・モデル：準組織的集団の観点からの検討」『実験社会心理学研究』50巻1号, 76-88, 2010年。
- 細田聡・井上枝一郎「緊急事態での人間行動の特徴に関する一考察」『労働科学』76巻12号, 519-538, 2000年。
- 井上学「熊本地震の行政対応—失敗から学んだこと— (要約)」『国際文化研修』Vol.100, 22-29, 2018年。
- 泉谷道子・安野舞子「日本人大学生のリーダーシップ・アイデンティティ発達過程の研究」『産業・組織心理学研究』30巻1号, 59-69, 2016年。
- 甲斐広文「熊本大学薬学部における熊本地震の記録」livedoor Blog, 2017年3月5日。
- 柿本竜治・吉田護「自主防災組織の事前の災害への備えと災害時の活動の関係性」『都市計画論文集』Vol.54, No.3, 1086-1093, 2019年。
- 亀田達也『モラルの起源—実験社会科学からの問い—』岩波書店, 2017年。
- 菊池洋「防災で問い直される『公』と『個人』」松岡勝美・金子由芳・飯考行編『災害復興の法と法曹』, 成文堂, 79-110, 2016年。
- 木村拓郎「本気で人材育成を」日本災害情報学会『News Letter』No.72, 2018年。
- 熊本大学“KUMADAI NOW (熊大なう.): 熊本地震, 避難所運営は熊大生”, 2016年7月28日号, <https://www.kumamoto-u.ac.jp/daigakujouhou/kouhou/kouhoushi/kumadainow/people/2016/p160728-1>。
- 熊本大学『熊本地震記録集 4.14 4.16 想定を超える混乱に直面して』2017年。
- 熊本県立大学学生ボランティアステーション『熊本地震 4.16 あの日は僕たちはLINE でつないだ 避難所運営の記録』熊日出版, 2019年。
- 黒木邦弘・花田昌宣・高木亨・那須久史「平成 28年 (2016年) 熊本地震と熊本学園大学避難所 運営: 避難所の方針と災害ソーシャルワーク実践の一考察」『社会福祉研究所報』47号, 169-185, 2019年。
- 黒木誉之「災害とソーシャル・キャピタルに関する一考察—熊本県益城町津森地区を事例に—」『非営利法人研究会誌』VOL.22, 93-104, 2020年。
- 南博・村江史年「大規模災害時に大学が市民の避難所等となる際の課題」『地域戦略研究所紀要』4号, 23-51, 2019年。
- 諸橋和行「8年間の経験から避難所運営のあり方を考える」日本防火・危機管理促進協会編『避難所のあり方: 避難者・避難生活にかかわる実態と課題』, 1-10, 2021年。
- 元兼正浩・鄭修 yeon・柴田里彩・原北祥吾「震災と学校の危機管理 (2): 他分野研究の動向と教育経営学的アプローチの可能性」『九州大学大学院教育学研究紀要』22号, 85-101, 2020年。
- 村田藍子・斎藤美松・樋口さとみ・亀田達也「ヒト社会における大規模協力の礎としての共感性の役割」『心理学評論』Vol.58, No.3, 392-403, 2015年。
- 新谷優「助け合いの文化心理学」『心理学評論』Vol.63, No.3, 329-345, 2020年。
- 則定百合子「大学サークル集団における心理的成果—高田論文への意見論文—」『青年心理学研究』30巻2号, 153-157, 2019年。
- 櫻井茂男・村上達也「共感性と社会的行動の関係について—溝川・子安論文へのコメント—」『心理学評論』Vol.58, No.3, 372-378, 2015年。
- 杉田義郎「コロナ禍で求められる大学の姿勢」coop 学生総合共済, 2022年5月。
- 高田治樹「大学生サークル集団への入団理由と組織構造との関連」『立教大学心理学研究』59号, 25-

- 40, 2017年。
- 高田治樹「大学生サークル集団における行事活動の心理的成果の探索的検討」『青年心理学研究』29巻2号, 71-89, 2018年。
- 高橋唯『サークル集団における組織的コミットメントに関する研究』首都大学東京(2016年度卒業論文), 2017年, [https://s1b3f788bd622c1b6.jimcontent.com/download/version/1521927630/module/11186463791/name/takahashi\\_2016.pdf](https://s1b3f788bd622c1b6.jimcontent.com/download/version/1521927630/module/11186463791/name/takahashi_2016.pdf), (2024年1月5日に参照)。
- 戸村理「米国人から見た日本の戦後大学改革—ダラス・フィン(1951)『戦後日本の高等教育改革—』『大学経営政策』13号, 219-233, 2023年。
- 上田竜平「助け合いの社会神経科学」『心理評論』Vol.63, No.3, 286-303, 2020年。
- 山田誠「平成 28年熊本地震と2つの村の災害マネジメント—国の災害対応策の作用と地域特性の交差—」『(鹿児島大学) 経済学論集』91号, 37-72, 2018年。
- 山田誠「熊本地震における避難所と大学・大学生—計画・マネジメント論から群れの意識へ, そして運営の担い手たち—」『熊本学園大学 経済論集』28巻1-4合併号, 183-209, 2022年 (a)。
- 山田誠「西米良村での大学生イベントと青年期の自己形成—アクティブラーニングと対置する「深い学び」の実践—」『(鹿児島大学) 経済学論集』98号, 45-65, 2022年 (b)。
- 山下博之「地域防災における共助とローカル・ガバナンス」『危機管理学研究』4号, 34-43, 2020年。
- 横山孝行「大学サークルの支援に関する一考察」『東京工業大学工学部紀要』Vol.34, No.2, 8-14, 2011年。
- 横山孝行「クラブ・サークルのリーダー学生におけるリーダーとしての自信と環境要因との関連の検討—知覚された集団サポートおよび組織風土の観点から—」『東京工業大学工学部紀要』Vol.39, No.2, 1-9, 2016年。
- “416”編集委員会『平成 28年熊本地震 熊大黒髪避難所運営記録集 416 私たちがやったこと 未来へ伝えたいこと』2017年(本文では, “416”編集委員会, 『記録集』と略記)。